

2020年横浜ナザレン教会・聖霊降臨節第二十三主日(11/1)礼拝
「イエス・キリストという道」

ヨハネによる福音書第14章1節から7節

【聖書】

ヨハネによる福音書 14:1「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。2 わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであらうか。3 行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。4 わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。」5 トマスが言った。「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるのでしょうか。」6 イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。7 あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知ることになる。今から、あなたがたは父を知る。いや、既に父を見ている。」

1 「心を騒がせるな」

先ほど賛美しました讃美歌494番「我がゆく道」は、キリスト者に愛された曲のひとつです。それもこれも「我がゆく道、いつかになるべきかはつゆ知らねど」という冒頭の歌いだしの言葉に、私達が深い共感を覚えるからではないかと思うのです。「人生は道のような。私達が生きていく途上には思いもかけぬ事、予想だにできない事が起こる。」人の一生という道には、山あり谷あり、どんな谷かどんな山か、人によって全く異なりますが、どういう一生になるか分からない事は共通しています。生きていけば、これがないと生きていけないと頼りにしていたものさえ、なくしてしまうという事も起こります。そういう時、私達、何をどう考えていいか分からなくなる、混乱する、思いが千々に乱れます。しかし、そんな私達に、主は語りかけてくださいます。「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。」今日の聖書テキストの冒頭の言葉、ヨハネによる福音書14章1節です。

主がこの言葉を話されたのは、逮捕され十字架に架かる前日のことでした。ヨハネ福音書によれば、十字架にかかる前の日、主は弟子たちを集めて長いお話をされます。イエス様は、渾身の愛を込めて、弟子たちに何を語られたのでしょうか？それは、もうすぐ自分は弟子たちの前からいなくなる、という事でした。弟子たちは、不安にざわつきます。彼らは、イエス様と出会い、この方なら自分の人生を賭けるに足る方だと思って全てを捨ててイエス様についてきた者達です。イエス様は、深い知識と神の力にあふれているお方なのに、威圧的に人を支配されない、却って、社会が見捨てた弱く小さい者の傍らに寄

り添う方、子供をなくした親の悲しみや、病にある人々の苦しみを、ご自身の悲しみ、苦しみとしてくださり、救ってくださる方。病を癒し、食べ物を与え、人々を父なる神様の許へと連れ帰ってくださるお方。弟子たちは、そんなイエス様のお姿をすぐ身近に見てきて、「この方がいれば、大丈夫だ、なんの心配もいらない」と頼もしく思ってきたのです。その主イエスが、自分たちの前からいなくなる…と言われる。弟子たちは、不安になり、心は千々に乱れたのでしょう。だから、主は語られました。「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。」人生の思いがけない出来事に、心乱される私達に対する言葉でもあります。この言葉に始まって、主イエスはここで、神を信じて生きることは、どういうことかを私達に教えてくださっています。その主の御言葉に、今しばらく、耳を傾けていきたいと思います。

2 「わたしは道である」

今日の聖書テキストにはとても有名な主の御言葉があります。6節「わたしは道であり、真理であり、命である。」キリスト者の家庭に生まれた方で、道子とか道夫とか、名前に「道」がついた方がいますが、それは、今日の聖句にちなんで名付けられたことが多いようです。「私は道である」と仰った主イエスを思い起こし、イエス・キリストという道を歩む幸せな一生を送って欲しい、という親達が願い、祈りがこもった名前です。

このような親の気持ちを見ても分かる事ですが、わたしは最近、イエス・キリストを信じるという事は、宗教というよりも、ひとつの生き方ではないかと思うようになっていきます。地上を生きた神の御子であるイエス・キリストを思い起こし、キリスト・イエスの愛の眼差しの内に生きる、生活する、キリストと深く強く結びついて生きる一生は非常に幸福な生き方だ、なぜなら、それは、真理と命であるから。それが「私は道であり、真理であり、命である」という御言葉を通じて、イエス様が私達におっしゃりたい事ではないかと思います。

私達の人生は、道。道は、人と出会うところでもあります。同じように人生も出会いに満ちています。いや、私達の歩む道は、誰とどのような時に会うかによって決定づけられると言えるのではないのでしょうか。両親、家族、近所の人、学校や職場の人、様々な人たちと出会い、私達は影響を与え合いながら、人生を歩んでいきます。どういう人といつどこで会うかで私達の人生は大きく変わります。信仰もまた、イエス・キリストとの出会い、イエス・キリストを通じて神と出会うことです。私達は、自分の道の途上で、イエス・キリストと出会い、イエス様と共に歩むことで、父なる神を知り、そして、歩む道が大きく変えられていきます。信仰とは人間の力で、努力で得られるものではなく、私達の道で出会って下さるイエス様によって与えられるもの。それは確かなことだと思います。

3 エマオへの途上

「自分たちの歩みの途中で主イエスと出会い、共に道を行き、真理と命を知った者たち」というと、あるエピソードを思い出します。ルカによる福音書に記されたもので、「エマオへの道」と呼ばれる物語です。今から、この「エマオへの道」物語に沿って、主の「私は道であり、真理であり、命である」という言葉の意味を考えていこうと思います。

主イエスは、今日のヨハネ福音書の聖書テキストを含む長い長いお話を弟子たちになさいます。その後、弟子たちと共にゲッセマネの苑に向かい、イスカリオテのユダが連れてきた大祭司の手下の手にかかって逮捕されます。不当な裁判にかけられ、尋問されます。ローマ軍に渡され、ローマ帝国への反逆という罪をでっちあげられて、死刑判決を受けます。そして、拷問で徹底的に体を痛めつけられ、侮辱された挙句に全てを剥ぎ取られ、手足を十字架に釘付けにされる死を迎える事となります。自分が十字架にかかることを考えると、身の毛もよだちます。周りには多くの人がある、しかし、誰ひとりとして自分を助けてはくれないのです。これほど厳しい孤独というものはありません。その絶対的な孤独の中、自分の体の重みで磔にされた体は裂け、肺が押しつぶされ、呼吸困難になり、多臓器不全で死にいたる。これが十字架の死、最も惨めで残酷な死。主イエスは、命と真理どころか、絶対的な孤独と滅びへの道のようなのです。

しかし、この死、私達人間の死を端的に表しているように思います。私達は、いつか、必ず死にます。ある哲学者は、「私達の人生において、最も現実的なものは死だけだ」。私達の道こそ、死への道。その死は、どんなに親しい人であろうとも、共にする事はできません。最後はひとりで滅び行くしかないので。私達人間は死を越える事はできません。死によって途切れるのが私達の人生です。

何故、人間は死を越える事ができないのでしょうか。聖書は、私達人間が、永遠の神を神とせず、自分たちを神として自己中心的に生きるからだというのです。確かに、自己中心的な思い、自分たちさえよければいい、という思いから完全に自由な人はいないと思います。だから、私達のつくる社会は、罪と悲惨に満ちています。いじめも虐待も、不正もなくならないし、争いも絶えません。これは人間から見れば当たり前の事です。神がご覧になれば、私達は誰ひとり免れることなく罪人です。神は完全な正義の方だから、自己中心的な人間の罪を見過ごすことはできません。天の御神は、完全なる正義であられる以上、人間を滅ぼすしかないので。だから、私達人間は、肉体がなくなれば、その存在は滅んでしまうしかない、と、聖書は語ります。

しかし、その一方、神は完全なる愛の方、私達人間を深く愛しておられる、私達が罪に滅びゆく事を深く悲しまれます。天の御神は、私達に必死に呼びかけられます、「あなた方は滅びてよいのだろうか。悔い改めて私のところへ帰っておいで」。しかし、この神の愛の呼びかけに答えたのは、ほんの僅かな人だけ。大半の人間は、神の叫びを無視し続けます。そこで神は、ご自身と一心同体と言ってよい最愛の独り子、神の御子を、人間として私達の世界に宿らせました。そして、この人となった神の御子に、私達人間の罪を全て肩代わりさせて審き、十字架に架けました。イエス様も、み父の私達に対する義なる愛を受け入れ、私達のつくべき十字架に、ご自身がついてくださいました。ですから、イエス様の十字架の無残な死は、まさに私達人間の死にほかならないのだと思います。

さて、主イエスは、十字架で私達人間の死を死んでくださった、完全なる骸となり、墓に葬られます。三日後、不思議なことが起こりました。主の亡骸を整えたいと願った女たちが葬られた墓に行ったのですが、主のご遺体はありません。墓は、全くのからでした。途方にくれる彼女達の前に、天使が現れて告げます。「あのお方はここにはいない、復活されたのだ」。主イエスは死に打ち勝った、それは神の義なる愛が罪に勝利した瞬間でした。

このイエス・キリストの十字架の死と三日目の甦りによって表された神の義なる愛こそ、「真理」だと言われています。時を越えて滅びない神の義、神の愛こそ、神の真理。だからこそ、十字架と復活の主イエスは、「私は真理である」とおっしゃいました。この真理が、私達の許にやってきてくださり、私達とであってくださいます。「イエス・キリスト」という「真理」は、何か宇宙のどこかの静かな場所に、高くそびえ立つ壁に刻まれたような、不動のものというわけではないのです。私達人間の人生という道へと突入してくる真理です。ダイナミックに私達の人生に関わってください。私達と出会って下さる神の義なる愛、イエス・キリストという名の「真理」です。

さて、女達は大急ぎで弟子たちが集まっている家に戻り、主が復活されたことを伝えます。しかし、弟子たちは信じる事ができません。却って、心を騒がせ不安になります。「イエス様の亡骸はいったいどこにあるのか、誰がなんの目的で取り去ったのか」「弟子である私達が、反逆者である男の遺体を隠し、『彼は復活した』と噂を流した、という咎で自分たちがローマ軍に逮捕され、イエス様と同じ十字架にかけられるかもしれない」。弟子たちは、心騒がせ、恐れに支配されます。私達でもそうなったでしょう。その弟子たちの内の二人は、エルサレムを後にして、故郷のエマオに戻ろうとします。イエス様の復活の噂に脅え、故郷に逃げ帰ろうとする彼らの顔は暗く沈んでいました。

しかし、甦られた主イエスは、この暗い顔をした二人の弟子の後を追いました。そして、エマオの道の途上で、二人に出会い声をかけてくださいました。けれども、二人はイエス様だと気づきません。主は、二人の弟子と共にエマオ

への道を歩み始めます。道を行きながら、この三日、エルサレムで起こったことを話す二人。その話しに答えるように、イエス様は、聖書を通じて、父なる神様のことを二人に語り聞かせます。イエス様の言葉に聞き入る二人。気づけば、不安に満ちていた心、恐れで凍りついたような心は溶かされていました、熱く燃やされていました、不思議な喜びに満たされていました。このイエス様と二人の弟子のエマオへ道を、島崎光正さんという詩人が次のように歌っています。

「エマオの村に向かう
足の重い二人の弟子に
甦りのイエスは加わった。
それとは知れず、
互いに、
話しはアネモネの花のように心にはずみ、
むしばまれた丸木橋の上では、
イエスが一番さきに渡り、
また三人で並んで旅をいった」

むしばまれた丸木橋は、死の象徴だと言われています。死の丸木橋は主イエスが先に渡られました。ですから、続く二人も丸木橋から落ちることはありませんでした。そして、アネモネは、イエス・キリストの復活の命の象徴です。主はもとの死すべき体、私達の命のように、体が死ねば滅んでしまう命に、蘇生したのではありません。死を越えた命、永遠の命へと甦られたのです。主が「私は命である」という「命」とは、死から解放された永遠の命のことです。不安と恐れに満たされ、主イエスと同じような十字架の死から逃れるつもりで、却って死に向かって歩んでいた二人の弟子たち。彼らの道に、主イエスが来てくださいました。そして真理を示し、永遠の命の道と変えてくださったのです。

4 神の御許のすみか

この永遠の命の道はどこに続いているのでしょうか。永遠なる御神へと続いています。父なる神のすぐ傍ら、大きな愛の内に、心をほどこ、神の静けさにゆったりとくつろぐ命。限りある命を死に向かっている私達、死を生きている私達に、この永遠の命を与える為、主は十字架についてくださいました。今日の聖書、ヨハネ福音書の第14章の2、3節「私の父の家には、住むところが沢山ある。」「行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻ってきて、あなたがたを私のもとに迎える。」とは、イエス様の十字架と復活を示していると言えます。

「父の家には、住むところが沢山ある。」の「沢山」は、「満ち溢れ有り余るほど」と訳せる言葉です。ですから、信仰が確かですっきりしている聖人君子、

選ばれた少数精鋭の人々の場所しかないというわけではありません。そうではなくて、あらゆる人の住む処がある。主の言葉に右往左往するような弟子たちの場所もあるし、人生の様々な出来事に心乱され、父なる神を見失うような私達一人一人の為の部屋もまたあるのだと主イエスは仰っています。この父なる神の御許にある素敵で楽しい部屋、私達一人一人の為に特別にイエス様をご用意くださった部屋こそ、私達ひとりひとりが、「ここは、私が本来いる場所だ」と確信でき喜べる所なのだと思います。その場所を目指して生きるのが、キリスト者の人生。冒頭の讃美歌の後半で、「備えたもう主の道を踏み行かん」と歌われた「主の道」です。

だから、キリスト・イエスによって開かれた永遠の命の道こそ、イエス様そのもの。改めて考えると、道がイエス・キリストそのものというのは、不思議な言い方です。しかし、主はあえてそう言われました。イエス・キリストというお方は、書物などで学んで分かるものではない、何か外側にたって客観的に分析・評価できるようなものではない、その中に飛び込んで生きるもの、だから「道」なのだと思います。私達の人生を導いてくださるイエス様と出会い、イエス様と共に生きる、イエス様に支えられて生きる、イエス様に従って生きる、イエス様の内を生きる、見えないイエス様、聖霊と対話しつつ生きる、その時、私達の人生は、イエス・キリストを生きる事となるのです。イエス・キリストを生きるとは、苦しいことや悲しいこと、試練と思われる事が全くない平坦な道のりではありません。いえ却って人間的な考えで見れば、大変困難な所を辿る道に見えるのではないかと思います。しかし、その苦しみや痛みをひとりで耐えるではありません。イエス・キリストと共に忍耐するのです。イエス様を通して父なる神を「天のお父ちゃん」と呼び求め、助けや導きを受けて生き方。その時、自分では思いもよらない道が開けます。やられたらやり返す道、自分の欲望を満たす道、人間に最も都合のよい道ではない、私達が決して進んで選ぼうとしない道、自分に罪を犯した者や敵対者を赦す道、自分の思いよりも神の思いを優先する道。悪を成敗する道ではなく耐え忍ぶ道。人間的な思いではとても選べそうにない、だけれども、そこをたどらせて貰えるからこそ、イエス・キリストという道です。いつも私達には新しい道、新鮮な驚きと喜びに満ちた歩みが待っている、それがイエス・キリストという道です。自己中心的な自分ではとても歩めないような道だからこそ、イエス・キリスト。それこそ、どうしようもない腐ったような現実を変え、時代を切り開く歩みとなるのではないのでしょうか。だから、ある方が言ったように「天国への道も、また天国。」実に幸いな生き方です。

5 召天者記念礼拝

今日は、横浜ナザレン教会に連なって召天された方々を通して、父なる神を礼拝する召天者記念礼拝です。横浜ナザレン教会に連なる召天者のお一

人お一人のお名前を、このあと、読み上げます。皆さん、お一人お一人、それぞれ全く異なる歩みをされたように見えます。しかし、皆さん、ひとつの道、イエス・キリストという道を生き抜き、天の父なる神のみそばで、イエス様をご用意くださったすみかに、今静かに眠っておられます。やがて私達もそこに参ります。そして、いつかは分かりませんが、神が定められた終わりの日、永遠の朝がやってきます。その時、甦りの光の中、私達はイエス様から名前を呼ばれるのです。「ひろし、ひろし、起きなさい」「豊子、豊子、おきなさい」というように。そして、主が手をとって起こしてくださるのでしょうか。そこには、懐かしい信仰の仲間たちがいます。この永遠の日曜日を迎え、私達はイエス様のいらっしゃる場所に共にいる事を喜び祝うのです。この甦りの朝を目指して、今しばらくは、この地上に開かれたイエス・キリストという道を、信仰の仲間たちと共に生きていきたいと、心から祈り願います。